

富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン ～ 35 ミソハギ～

職藝学院

教授 渡邊 美保子

ミソハギは日本に自生する宿根草です。日当たりの良い水辺などの湿地を好みますが、水はけが良ければ乾いた所でも育ちます。7月になると、ちらほらと小花が咲き始め赤紫色の紙をしわくちゃにしたような6枚の花弁を開きます。旧暦のお盆の7月15日頃に見頃になり9月初旬頃まで長く咲いてくれます。草丈は80cm～100cm位で、咲きながら花茎を伸ばしてゆきます。富山では「ショウライバナ」と呼ばれていて、お盆にお墓にお供えする花とのこと。畑や田んぼの畦に植えられている印象があるため、好んで植える花ではないようです。ミソハギは長く花を楽しめて立ち姿が美しい花なのですが。

ミソハギの葉は、茎の真上から見ると十字架が重なっているように見えます。向かいあう葉が互い違いに規則正しく付いているからです。6月下旬になると、花茎の先にある黄緑色の小さな葉の上に桜でんぶをちょこんと置いたような姿になります。これが蕾の集団です。蕾は一日ごとに形がはっきりと分かるようになり、四角い茎を一周するように並び、これを何段も繰り返し一番下の段から咲き始めます。一つ目の花が開くと、翌日には二つ、三つと咲き進み、茎をぐるりと一周して花の冠のような姿になります(写真1)。この花の輪が何段も重なって、やがて茎の先の方まで紫色の小花で埋め尽くされます。



写真1 7月初旬。下の段から順番に開花する。

ミソハギの花には、雌しべの長さが違う3つの花のタイプがあります。雌しべが長いものは、花の真ん中から突き出ているのですぐ分かります。中ぐらいの雌しべは、花から少しだけ顔を出します。短いものは花の中に隠れています。もっと面白いのは雄しべです。12本の雄しべのうち6本は長くて藍色の花粉、6本は短くて黄色の花粉をつけるのです(写真2)。12本全て黄色の花粉をつけるタイプもあります。1本の花茎に3つのタイプが咲くのではなく、同じ株では3つのうちのどれか1つのタイプの花が咲きます。3つの花のタイプがあるのは、同じ花のタイプ同士では受粉

しても種ができにくい仕組みがあるそうです。近親結婚を防いで子孫の遺伝子に多様性を持たせるためなのです。

お手入れはほとんどありませんが、地下茎で横にどんどん広がってゆくので広々とした所を選んで植えましょう。組み合わせは、ミソハギの赤紫色の花を引き立ててくれる紫色のキキョウや、同系色のエキナセアなどがおすすめです(写真3)。8月のお盆の頃に開花を遅らせて見頃にするためには、6月の始めに茎の長さの半分まで切り戻すと良いでしょう。



写真2 長・短6本ずつの雄しべ。雌しべは中に隠れている。



写真3 ミソハギの花。左は、キキョウ。7月中旬。

注) 前号記事の黒アゲハの表記を、キアゲハに訂正いたします。